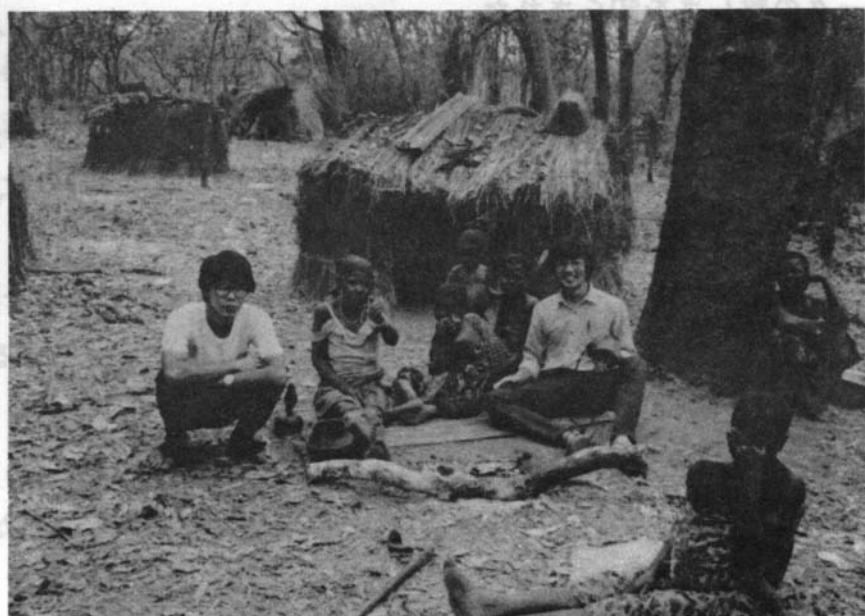


フィールドワーク



<バテンボキャンプにて>

男はハンティングに出かけ、昼間のキャンプは女ばかりだ。

(右は室沢、左が横山)

(1) 調査報告をするにあたり

現地において実際に調査活動を行ったのは、1983年7月20日から8月8日であった。当初の予定では1ヶ月間ということであったが、我々(室沢と横山、通訳兼ガイドのジョン)3人がキャンプに入ってから動物が獲れなくなってしまう。彼らはその原因を我々の滞在に求めたようだ。白人としては初めての滞在だけに、我々の日々の行動が、彼らの目には理解しきれない奇怪なものに映ったと考える。キャンプ内では出来る限りの現地主義を通したのであるが、狩猟民のキャンプに滞在すること、フィールドワークの難しさを知らされた。

我々と通訳との間では英語で、通訳とバテンボの間ではベンバ語・タブア語・スワヒリ語・ルバ語とテンボ語のミックス語の4種類の言葉で会話がなされた。やはり、無文字社会であり、話し言葉(テンボ語)の社会であった。通訳の占める割合が非常に高い調査であったと思う。

我々がフィールドワークを行ったキャンプは、カサマ村から十数キロメートル北東方向の山へ入った地で、キバワ=ゴイが首長を務めるキャンプであった。このキャンプにおけるバテンボの人々は77人であった。(8月に入ってから十数人の増加があった。)そして、農耕民(肉を求めてキャンプへ交易に来る人、バギギと呼ばれる)が常時数人は滞在していた。このキャンプを第1キャンプとして、20~30人の成員をもつキャンプが、他に三つほど近くにあった。

シャバ州のバテンボと呼ばれる人々は推定で2千人ほどらしい。キャンプ(バンド)ごとに狩猟採集生活を送り、移動しているようで、9月末から5月ごろまで続く雨期の間は、農耕民の村、カサマ村の近くに移動しているらしい。